（別紙様式３）

令和５年３月３１日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　兵庫県神戸市中央区下山手通 5-10-１
管理機関名　兵庫県教育委員会
代表者名　　教育長　藤原　俊平

令和４年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

１　事業の実施期間

令和４年４月１日（契約締結日）～　令和５年３月３１日

２　指定校名・類型

学校名　　兵庫県立佐用高等学校
学校長名　西坂　美樹
類型　　プロフェッショナル型

３　研究開発名

「食」を通じてローコスト・ハイクオリティ社会の実現を目指すプロフェッショナル人材の育成　～佐用風土（Sayo Food）を活用したモデルプランの構築～

４　研究開発概要

本研究は「食」を中心に①特産物による商品開発②健康寿命の延伸③安心・安全な町づくりの三本柱で展開している。これまでも特産品を使用した商品開発には取り組んできたが、事業を通じて伝統料理、保存食へと発展させる目的がある。販売が主目的ではなく、「食」を通じて「佐用風土（Sayo Food）」と地域人材を活用し、健康の見直しや災害時の対応などで町を活気づける。その中で、伝統料理や保存食を「高校生訪問サービス」等の実習で高齢者に提供するなど地域と協働するために、履修科目の新規充実を図り、学校設定科目の活用でカリキュラム・マネジメントを行い、生徒の学びを深め地域課題の解決につなげる。

５　学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用の有無

・学校設定教科・科目　　[開設している]　・　開設していない
・教育課程の特例の活用　活用している　・　[活用していない]

6　運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
新谷　浩一	兵庫県教育委員会　高校教育課長	学校教育に専門的知識を有する者
江見　秀樹	佐用町役場　企画防災課長	関係行政機関の職員
浅野　博之	佐用町教育委員会　教育長	学校教育に専門的知識を有する者
岸田　恵津	兵庫教育大学　教授	専門的知識（生活科学等）
田和　久典	IDEC 株式会社　ｸﾞﾘｰﾝｿﾘｭｰｼｮﾝ事業部長	学校教育外部有識者（産業）

7　高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
兵庫県教育委員会	高校教育課副課長　清水　道子
兵庫県立佐用高等学校	校長　西坂　美樹
佐用町	町長　庵逧　典章
佐用町教育委員会	教育課　教育推進室長　西川　典男
IDEC 株式会社	社長　舩木　俊之
ナニワフード株式会社	社長　松田　良彦
島根大学	教授　作野　広和
兵庫教育大学	教授　永田　智子
日本調理専門学校	校長　水野　博
美作市スポーツ医療専門学校	校長　黒瀬　通弘
兵庫県立山崎高等学校	校長　武田　由哉
佐用町自治会連合会	会長　藤本　正文
一般社団法人ドローン減災士協会	代表理事　久保　正彦

8　カリキュラム開発専門家，地域協働学習支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	作野　広和	島根大学　教授	非常勤
カリキュラム開発専門家	永田　智子	兵庫教育大学　教授	非常勤
地域協働学習実施支援員	服部　憲靖	佐用町企画防災課	非常勤

9　管理機関の取組・支援実績

（1）実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
コンソーシアム委員会		○					○			○		
運営指導委員会				○					○	○		
研究成果発表会									○	○	○	

（2）実績の説明

①　コンソーシアム及び運営指導委員会を通した事業管理と指導・助言

コンソーシアム及び運営指導委員会に高校教育課の担当指導主事を派遣し、大学・企業・関係機関等の専門家と意見交換を図りながら、事業の成果と評価をもとに指導・助言を行った。

②　事業終了後の自走を見据えた取組について

事業終了後、本事業の取組を持続可能なものにするために、人的・財政的な支援を行ってくれる佐用町の協力を得て自走に向けた取組を支援する。

１０　研究開発の実績

（１）実施日程

業務項目	実施期間（契約日　～　令和５年３月 31 日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①佐用の特産品を活用（商品開発）		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
②佐用で暮らす人を守る（健康寿命の延伸）		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③佐用の水害から学ぶ（安全安心な町づくり）		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

（２）実績の説明

①研究開発の内容や地域課題研究の内容について

佐用町は、老年人口率４０％（全国平均の１．５倍）という現状に加え、平成２１年台風９号の豪雨被災の教訓を生かし、地域の活性化と安全・安心で充実した暮らしができる町に進化させることが課題である。本校もこの課題を認識し、町と協働で地域の活性化・貢献活動に取り組んできた。

この事業では地域特産品や伝統料理、健康食といった「食」を中心に町と連携している「佐用風土（Sayo Food）」に関する取組を発展充実させ、「ローコスト・ハイクオリティ社会」の実現に貢献するとともに、「高校生訪問サービス」等の実習や探究活動を通して地域を支えるプロフェッショナル人材を育成するカリキュラムモデルプランを構築する。

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置づけ

【佐用の特産品を活用（商品開発）】

a　総合的な探究の時間（１学年）

佐用町の調査研究を通じて地域課題を考える。「食」を中心に特産品に関しての知識・技術における基礎的能力の習得を図る。

・佐用町を知る「佐用学」での探究活動（佐用町企画防災課職員による講話、タブレットを活用した調べ学習・発表の探究活動）（１０月～１１月）

生徒の感想には、「特産品などを知ることができ地域に愛着を感じた。」など、地域への興味関心が深まっていることが確認できた。

b　生活産業基礎（１学年）

・商品開発におけるプロセスについての知識習得（５月～６月）

特産品による商品開発において基礎知識を習得した。

c　フードデザイン（１学年）

・「食」に関する基礎知識と基本的技術の習得、地元食材を用いた調理実習（５月～３月）

・地域の保育園児を学校に招待し、食育とふれあいクッキングの実施。（１月）

d　課題研究「食物」（２学年）

・佐用町の特産物である夢茜トマト、佐用もち大豆を用いた商品開発（５～１１月）

月に一度のペースで、佐用町企画防災課、保健福祉課、農林振興課、栄養士、農産物

生産企業、商品製作企業の担当者と、校内で生徒を交えて商品開発会議を行った。会議の進行を外部の方に委託することで、生徒の主体的な学びにつながった。本年度は、夢茜トマトと佐用もち大豆を用いて「トマトスープ」と佐用もち大豆と夢茜トマトジャムを使用した大豆バー「SOY　STICK」を開発した。

・「姫音祭」にて大手前公園での広報活動及び展示即売会（１１月）

本年度の商品開発に関する広報活動及び商品の即売会も行い、生徒はプレゼンテーション能力だけではなくコミュニケーション能力などの向上も見られた。生徒の感想には「商品を通じて佐用町をPRできた。」「お客さんにありがとうと言われて嬉しかった。」など達成感を得られ、情報発信力の向上も見られた。

e　ヒューマンサービス（２学年）

・佐用町社会福祉協議会との協働で「給食サービス」の参画を通じて、独居高齢者のサポートを行うための地産地消メニュー開発を行った。単に調理するだけでなく、お弁当のパッケージにメッセージを添えるなどの工夫を凝らした。また、大量調理の技術が向上するとともに、ふるさとに対する誇りや愛着も深まっている。さらに、はがきアンケートを実施し、高齢者に寄り添ったメニュー改善も行った。（５～１１月）

f　フードデザイン（２学年）

・「食」に関する応用的な知識と技術の習得、地元食材を用いた調理実習（５月～３月）

・日本調理製菓専門学校に訪問し、大量調理技術の講義と実技により専門的な知識と技術を習得した。（７月）

g　フードスペシャリスト（３学年）

・地域のグランピング施設「glaminka SAYO」にて「高校生レストラン」の開催（１０月～１２月）

宿泊客に対して、昨年度開発した商品の「夢茜トマトソース」と「夢茜トマトカレー」を使ったピザ作り体験と佐用町等についてのプレゼンテーションを行った。

・地域の特産品を使った「食改善レシピ本」の発行（１２月）

地域住民のあらゆる世代を対象とした「食改善レシピ」を作成し、地域住民に配布した。また、本校HP上のブログでも掲載した。

h　課題研究「食物」（３学年）

・子育て支援センター「ママプラザ」でのママ支援の食育活動と食育BOOKやチラシの配布（１１月～２月）

カフェの企画、地元食材を用いた幼児向けメニューの開発は行ったが、本年度も新型コロナウィルス感染拡大防止のため、校外では実施できなかった。校内でカフェを開催し、開発したメニューの料理を教員に提供した。

・平福にあるお休み処「瓜生原」での高校生カフェにて、地元食材を用いたお弁当の提供による地産地消啓発活動（１１月）

地元食材を使用したお弁当の献立を考案し、「佐用高校生カフェ２０２２」としてイベントを行った。地元住民や古民家職員との交流を通じて生徒はコミュニケーション能力や企画運営力を習得し、達成感を得ることができた。

i　フードデザイン（３学年）

・「食」に関する専門的な知識と技術の習得、地元食材を用いた調理実習（５月～３月）

・日本調理製菓専門学校に訪問し、カフェ実施についての講義と実技により専門的な知識と技術を習得した。（７月）

【佐用で暮らす人を守る（健康寿命の延伸）】

a　総合的な探究の時間

佐用町の調査研究を通じて地域課題を考える。「食」を中心に健康寿命に関しての知識・技術における基礎的能力の習得を図る。

・佐用町の水害についての調べ学習とポスターセッション（１月）

・佐用町の人口や高齢化率の現状、また生活実態を調査するためのアンケートの実施（１月～２月）

b　生活産業基礎（１学年）

・生活産業と関連する職業についての知識の習得（５月）

地域の求める人材をベースに、生活産業分野での職業について学習した。２学年実施のインターンシップに向けて、生徒は意識付けと知識の習得ができた。

c　ヒューマンサービス（２学年）

・佐用町社会福祉協議会との協働による「給食サービス」の参画を通じて、独居高齢者の生活サポートを行い、ふるさと意識と調理技術の向上が見られた。（５～１２月）

d　生活と福祉（２学年）

・美作市スポーツ医療看護専門学校にて福祉・介護の専門知識と技術の習得（７月、１月）

・播磨園やいちょう園でのレクリエーション交流による体力づくり啓発活動（３月）

e　生活産業基礎（２学年）

・家政科２学年の生徒全員が、一社一人体制で５日間の就業体験実習（インターンシップ）を通して地域の職業人に学ぶ（８月）

地域の企業でのインターンシップを行った。企業探しをはじめ、打ち合わせのアポイントメントなどを生徒自身が行うことにより「高校生訪問サービス」実施に向けた一助となった。

f　ヒューマンサービスⅡ（３学年）

・「高校生訪問サービス」にてアンケート調査やレクリエーション交流、防災や食生活改善の提示（９月～１２月）

高齢者の生活実態を調査し、課題発見・解決力やコミュニケーション能力が向上した。

g　課題研究「被服」（３学年）

・佐用保育所や子育て支援センターの利用者に向けて衣装製作を行い、健康寿命の延伸を心と身体の両面からサポート（９月～１２月）

子育て支援センター利用者に出演衣装を提供し、１１月に行われた地域文化祭のファッションショーで生徒と共演した。

h　課題研究「福祉」（３学年）

・きらめきケアセンター、佐用保育所、子育て支援センターでの定期的な実習で、地域住民の生活サポートと実態調査（８月～１０月）

保育・介護の班に分かれ、各施設で実習を行った。継続的な訪問を行うことにより、生徒は進路に向けての職業意識の高揚と専門技術の習得につながった。

【佐用の水害から学ぶ（安全・安心な町づくり）】

a　総合的な探究の時間（１学年）

佐用町の調査研究を通じて地域課題を考える。「食」を中心に防災に関しての知識・技術における基礎的能力の習得を図る。

・佐用町を知る「佐用学」での探究活動（佐用町企画防災課職員による講話、タブレットを活用しての調べ学習）（５月～７月）

地域に対する興味や関心を深める学びとなった。

・佐用町の水害についての知識習得と町歩き（２月）

佐用町の水害被害を知らない生徒が多くいる中で、昨今の頻発する災害に備えるためにも、防災についての基礎知識をしっかりと学習できた。

ｂ　生活産業基礎（１学年）

・商品開発におけるプロセスについての知識習得（１０月～１１月）

ｃ　フードデザイン（１学年）

・佐用町健康福祉課職員による災害に関する講義といずみ会による災害食（パック調理）の実習（１１月）

ｄ　フードデザイン（２学年）

・日本調理製菓専門学校に訪問し、災害時の食についての講義と実技により専門的な知識と技術を習得した。（７月）

ｅ　課題研究「福祉」（２学年）

・佐用町や佐用消防署、兵庫県立大学、地域住民との協働による「佐用合同防災訓練～KIZUNA 大作戦～」を企画・実施（５月～１２月）

学校内外の関係機関と生徒で合同会議を行い、防災訓練の企画運営を生徒が主体的に行った。佐用小学校の児童や近隣自治会の住民にも参加していただくとともに、本校普通科、農業科学科生徒にも体験的な防災学習を実施した。ドローンによる演習など多岐にわたり大規模な訓練になった。生徒には課題発見・解決力や企画運営力、コミュニケーション能力など多くの力が身に付く機会となった。

・佐用小学校における防災教育と災害備蓄食学習（１１月）

合同防災訓練に向けての案内と防災学習を兼ねて佐用小学校にて１年生児童を対象に生徒による防災学習と災害備蓄食（キャンディーレイ製作）学習を行った。

ｆ　ヒューマンサービスⅡ（３学年）

・合同防災訓練時に配布する防災リーフレットの作成（９月～１１月）

ｇ　フードデザイン（３学年）

・合同防災訓練時の災害食に関して２年生と情報共有（１０月）

【学校家庭クラブ活動】

学校家庭クラブの基本方針である「創造」・「勤労」・「愛情」・「奉仕」の精神を柱として、地域に貢献する目的で「研究活動、ボランティア活動、交流活動」を行った。

・「ふれあいの里上月」「龍北工房」にて地元食材を用いた焼菓子の定期販売を通して、地域の活性化と広報活動（５月～１２月）

・地域主催のイベントにて地元食材を用いた焼き菓子販売活動での地域交流（１１月）

・「兵庫県総合文化祭」での開発商品や特産物使用の皆田和紙アクセサリー販売を通じた佐用町の PR 活動（１１月）

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

・２学年「ヒューマンサービス」にて社会福祉協議会との協働で「給食サービス」の実施及び２学年「フードデザイン」の授業でお弁当の献立作成、「課題研究（情報）」でお品書きの作成

・２学年「課題研究（食物）」にて佐用町、企業との協働で特産品を使用した商品開発及び１学年「総合的な探究の時間」の授業内で「佐用学」の講義を受講

・１学年「総合的な探究の時間」にて防災学習及び１学年「フードデザイン」の授業で「災害パ

ッククッキング」講習会を実施
・３学年「ヒューマンサービスⅡ」にて高齢者に向けた食改善の提案及び３学年「フードスペシャリスト」にて「食改善レシピ本」の作成

④地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制
校内組織のビジョン委員会、教育課程委員会、キャリア教育推進委員会と連携・協働して、「インターンシップ」や「ヒューマンサービス」等の教育内容、「高校生訪問サービス」「高校生カフェ」等の体験活動や探究活動の充実に向けた協議・検討を行い、地域を支えるプロフェッショナル人材を育成するカリキュラムモデルプランの構築推進に取り組んだ。

⑤全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）
本事業を運営するため、校内組織に「地域協働部」を、校内委員会に「地域協働事業推進委員会」を新たに設置した。また、生徒の探究活動に対しては、全ての教職員が積極的に関わった。

⑥学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画の改善と見直しを実施
・方法を改善していく仕組みについて
カリキュラム開発等専門家が、コンソーシアム及び運営指導委員会で事業担当者からの報告を受けながら、成果の検証・評価を行い、計画・方法の改善策を助言した。それを地域協働推進委員会において、学校長を中心に確認し、不十分に思われる部分については、委員会としてどのように改善するかを協議し、改善する仕組みで事業を進めている。
また、月２～４回、学校長に、事業担当者が研究開発の進捗状況や課題等を報告し、指導助言を受けながら、適宜計画内容の確認と見直し・改善を図った。

⑦成果の普及方法・実績について
a　「兵庫県総合文化発表会」にて研究成果の周知
１１月に行われた「兵庫県総合文化発表会」において、特産品である皆田和紙を使用したキーホルダーやアクセサリーの販売、ファッションショーを行うとともに、研究成果を周知するため、地域との協働活動紹介パネルによる展示も同時に行った。
b　瓜生原での「高校生カフェ」にて研究成果の周知
１１月に行われた「高校生カフェ」において、地域の特産品を用いたオリジナル弁当の提供や焼き菓子の販売を行うとともに、地域との協働活動紹介パネルの展示も同時に行った。
c　さよう文化情報センターでの発表会の開催
１月に地元の施設を使用して本年度の研究成果の発表会を行うことで研究内容を地域に還元し、次年度以降の活動につなげる。
d　校内課題研究発表会の開催
２月に外部講師や本校職員、１年生に対して課題研究での取組の成果発表を行った。
e　報告書の作成
本年度の調査、研究、発表の成果として報告書の発行を行い、近隣高等学校や家庭に関する学科設置校、連携機関等に配布し、事業成果の還元を図る。

１１　目標の進捗状況、成果、評価
（１）生徒に身に付けさせたい力等について

三本柱で身に付けさせたい力等については以下のとおりである。1 年目の探究基礎力の向上、２年目の探究実践力の体得に続いて、３年目は探究発展力を身に付けることができるように本事業を展開した。

①目標の進捗状況

【特産品による商品開発】

１年	【探究基礎力】 ・ふるさと意識 ・表現力 ・プレゼンテーション能力 ・知識力	総合的な探究の時間	○佐用町による特別授業 ○佐用町についての調べ学習・発表
		生活産業基礎	○商品企画開発におけるプロセス学習
		フードデザイン	○食に関する基礎知識と技術の習得 ○幼児向け食育活動 ○各種コンテストへの応募
２年	【探究実践力】 ・企画力 ・表現力 ・プレゼンテーション能力 ・コミュニケーション能力 ・ふるさと意識 ・調理技術	課題研究	○特産品を使った商品開発 ○災害備蓄食の開発 ○佐用町への情報発信
		ヒューマンサービス	○地産地消の献立開発
		フードデザイン	○生徒による小学生に向けた食育活動 ○地元食材を用いた調理実習 ○各種コンテストへの応募
３年	【探究発展力】 ・企画力 ・情報発信力 ・課題発見・解決力 ・コミュニケーション能力 ・プレゼンテーション能力 ・ふるさと意識 ・調理技術	フードスペシャリスト	○「高校生レストラン」の実施 ○「食改善レシピ本」の製作
		課題研究	○「高校生カフェ」の実施 ○地産地消啓発活動
		フードデザイン	○特産品を取り入れた調理実習 ○各種コンテストへの応募

【健康寿命延伸に向けて】

１年	【探究基礎力】 ・ふるさと意識 ・プレゼンテーション能力 ・知識力	総合的な探究の時間	○佐用町の実態把握 ○モデル地区の実態調査計画
		生活産業基礎	○消費者ニーズ・商品企画に関する学習 ○職業についての調べ学習・発表
２年	【探究実践力】 ・調査・分析力 ・課題発見・解決力 ・情報発信力 ・企画力	ヒューマンサービス	○「高校生訪問サービス」の実施 ○「給食サービスボランティア」の実施
		生活と福祉	○福祉の基礎学習 ○「認知症サポーター」の資格取得 ○高齢者と福祉に関する講習会 ○美作市スポーツ医療看護専門学校への校外学習
		生活産業基礎	○インターンシップの実施
３年	【探究発展力】 ・企画力 ・コミュニケーション能力 ・情報発信力 ・プレゼンテーション能力 ・ボランティア精神	ヒューマンサービスⅡ	○「高校生訪問サービス」の実施
		課題研究	○地域の福祉施設での実習 ○子育て支援センター利用者や保育施設での「食育」活動 ○地域の高齢者や幼児、保護者との交流による心身のサポートイベント

【災害に強い町づくり】

１年	【探究基礎力】 ・基礎的知識、技術 ・課題発見力 ・ふるさと意識 ・プレゼンテーション能力	総合的な探究の時間	○佐用学、防災学習
		生活産業基礎	○佐用町に求められる人材把握 ○防災関連商品開発プロセス学習
		フードデザイン	○災害学習、パッククッキング実習 →いずみ会、佐用町による講習会
２年	【探究実践力】 ・情報発信力 ・課題解決力 ・企画力 ・プレゼンテーション能力 ・コミュニケーション能力	フードデザイン	○日本調理製菓専門学校での保存食についての研修
		課題研究	○「佐用合同防災訓練」の企画と実施 ○小学校への出前授業
３年	【探究発展力】 ・ボランティア精神 ・プレゼンテーション能力 ・コミュニケーション能力	ヒューマンサービスⅡ	○防災リーフレットの作成・配布
		フードデザイン	○防災訓練に向けて（２年生との情報共有）

② 成果

a 具体的成果

・「第２回プレゼン甲子園」決勝大会への進出（４１１組応募中１０組）
・「ぼうさい甲子園」はばタン賞の受賞
・「令和４年度防災力強化県民運動ポスターコンクール」佳作の受賞（７６２作品中５作品）
・「ひめじエコレシピ博覧会」ポスターセッションにおいて準優勝
・「第５３回 FHJ 日清製粉グループ全国高校生料理コンクール」学校賞の受賞（２５７校中１０校）
・「高齢者見守り事業啓発チラシ川柳」優秀賞の受賞

b 生徒の意識の変容

生徒意識の変容を見る目的でアンケート調査を実施し、「地域をよくするために、地域課題の解決に関わりたいと思う生徒の割合」が９０％、「地域の方々と交流を持ち、協働することへの生徒の満足度」が９４％となった。本事業開始時の目標値を超えた結果となり、家政科生徒の地域に対する意識の高揚から本事業の成果を捉えることができる。また、「地元佐用町への理解」や「地域への貢献」等については、他学科（農業科学科・普通科）に比べて高い結果が見られ、本事業の効果も見受けられる。

③ 評価

昨年度に引き続き、研究成果の評価として、生徒によるポートフォリオの作成やパフォーマンス評価、学力調査やアンケート調査などを通じて多面的な評価を行った。評価から本事業の取組を通して、生徒に身に付けさせたい多くの力を育むことができたと思われる。

また、本事業の実施に際して、職員会議等での連絡・報告等を通して全職員に対して周知理解を行い、生徒の探究活動等において全ての教職員が積極的に関われる体制作りが成果を生み出した要因となっている。

（２）生徒が主体的な学びをするための指導方法の工夫

課題解決に向けて、生徒が行う PDCA に合わせて教員が「待つ」→「見守る」→「褒める」→「期待する」の指導を行うことで、生徒が積極的に取り組み、主体的な態度を育成できるとの仮説を立て実行した。具体的には、P（計画）の段階では「共に考え待つ：生徒の自主的な活動を待つ姿勢」、D（実行）の段階では「共に行動し見守る：教員は側についていて見守る姿勢」、C（評価）の段階では「共に振り返り褒める：良いところを見つけて褒める姿勢」、A（改善）の段階では「共に改め期待する：生徒の挑戦を信じて期待する姿勢」で生徒のサポートを行った。

取組の一例を挙げると、商品開発の外部講師との会議において、外部講師との事前・事後の打合せを綿密に行うことで、会議中、生徒の活動を教員が意図的に見守ることで主体的な学びを促すことができた。また、「合同防災訓練」の企画運営において、佐用町や消防署、大学など多数の関係機関に対して事前の趣旨説明を行うことで、生徒が主体的に企画運営をすることができた。

本事業の中で、生徒が自ら軌道修正しながら主体的に活動を行う仕組みができ、今回の成果につなげることができたのではないかと推察する。

＜添付資料＞目標設定シート

１２　次年度以降の課題及び改善点

（１）新型コロナウィルスの影響による新しい生活様式の中での地域交流、貢献活動の在り方

「高校生訪問サービス」や「給食サービス」は地域の方々にとってかけがえのない交流事業であることが実証された。しかしながら、コロナ禍のため直接関わる活動が昨年度に引き続き制限されたので、コロナ禍でも影響がない方法を今後も研究していく。

（２）従来の事業の見直し

従来から活用している兵庫県等の事業には、特別非常勤講師、「ひょうごの達人」招聘事業、「インスパイア・ハイスクール事業、高校生ふるさと貢献・活性化事業、西播磨県民局事業、平福まちづくり協議会事業など、多くの事業があるが、それぞれが連動しているとは言いがたい。本校のスクールミッション・スクールポリシーを達成するため、本事業の成果を踏まえ、従来の事業を見直し、本事業内容を引き続き、効率的・効果的に実践できる体制を構築していく。

（３）佐用町との新たなコンソーシアムの構築

本事業は生徒にとっても地域にとっても非常に良い相乗効果があるということから、本事業指定終了後もコンソーシアムの体制を維持する。ただ、事業の継続には費用がかかることから佐用町の「地域と高校の協働による輝く人づくり支援事業」を活用しながら、コンソーシアムを充実させるため、佐用町と本校との新たなコンソーシアムの体制作りを進めていく。

（４）継続した「指導と評価の一体化」に向けて

本事業の継続のため、本事業内の活動を確立不変なものとして捉えることなく、生徒の実態や学校に求められるミッションに応じて継続的に見直しを行う。その上で、その時々に応じて本事業内で行ってきた評価内容を更新しながら「指導と評価の一体化」を図っていく。

【担当者】

担当課	高校教育課	ＴＥＬ	078-341-7711
氏　名	神田　貴司	ＦＡＸ	078-362-4288
職　名	主任指導主事	e-mail	Takashi_Kanda@pref.hyogo.lg.jp